

TSS 文化大学一般教養講座
平成 30 年 6 月 26 日 10 : 00 ~
於 TSS 新館 9 階スタジオ

私の国際交流体験

谷本 能文 (広島大学名誉教授)

私の国際交流体験は 1978 年のアメリカ留学に始まる。以来いろいろな形で 10 数か国を訪れ、いろいろと考える機会があった。その中の 2・3 をここで紹介したい。なお、訪れた国で受けた印象は、同じ国でも季節・場所・出会った人などにより異なる。ここで記するのは私の個人的な見解・各論であるので、その辺を理解してお読みいただきたい。

1. アメリカ留学時代

1978-1980 年ニューヨークのコロンビア大学に留学した。ハーレムに隣接する場所にある狭い敷地いっぱいに建物が建っていた。大学のすぐ近所に、巨大な大聖堂 Cathedral Saint John Divine がある。建設は 1892 年に開始され、いまだ未完成。St. John unfinished と呼ばれているようだ。120 年以上建設途中なのである。100 年もすればたいていの建物が朽ちてしまう日本ではとても考えられないタイムスケールである。ニューヨークに移民してきた人々のふるさとヨーロッパでは地震はほとんどない。またとても寒いところがあるので石造りのしっかりした建物に住んでいる。このような風土に育った人たちは、建物が永遠に存在すると考えても何の不思議もない。

一方、日本では物は永遠に存在することはなく朽ちていく。自然は時々刻々と変化していく。また、日本では木と紙で作られた家に住む。冬でも障子一枚を隔てた向こうは外界である。そのような環境で暮らす私たちとヨーロッパ人は、物の見方・考え方・大きく言うと思いがずいぶん異なることであろう。日本人ともの見方・考え方が違うのは、当然のことだと思った。

File:Cathedral Saint John Divine NYC.JPG

From Wikipedia, the free encyclopedia



Size of this preview: 800 × 600 pixels.
Full resolution (3,648 × 2,736 pixels, file size: 4.25 MB, MIME type: image/jpeg)

This is a file from the Wikimedia Commons. Information from its description page there is shown below.
Commons is a freely licensed media file repository. You can help.

2. 中国との交流

コロンビア大学留学中同じ研究室だった中国の留学生と偶然から連絡が取れ中国を訪れる機会をえた。これを機会に彼の研究所の学生が私の研究室に留学、所長の彼自身、彼の仲間の女性教授二名も次々と私の研究室に短期留学となり共同研究を行った。その中の一人の女性教授を家内と一緒にしまなみ海道に案内したとき、女性教授は専業主婦の家内を

見て羨ましいと言った。なぜなら自分たち夫婦は共働きしないと生活できないから。考えてみると、働く自由もあれば働かない自由もある。でも彼女には専業主婦という選択の自由はない。だから彼女はどちらの自由でも選択できる家内が羨ましいと思ったのである。

最近日本の政府・財界では女性に働く自由をと言っている。どうしてだろうか。これは単に労働者不足を緩和するため・消費人口を増やすためである。私が生きてきた時代は家族の中に働き手が一人いれば十分生活できた時代であった。今はたくさんの興味をそそる“もの”が巷に溢れ、つい買ってしまいたくなる。で、そのためには働かざるを得ない。果たしてなにが幸せなのか考えさせられるこの頃である。



3. ロシアとの交流

東京で開催された国際会議でロシアの Roman Morgunov 教授と知り合いになり、意気投合し共同研究を始めた。Roman は、私の研究室に滞在し数年間の共同研究が続いたころ、彼の所属する大学 Orenburg State University (OSU) と広島大学の教育研究学術交流を行わないかと持ち掛けてきた。二人で協定内容の検討などを練り、結局広島大学大学院理学研究科と OSU の部局間協定を締結するに至った。今から約 15 年前のことである。私が広島大学を退職した後、この事業は E 教授に引き継いでもらい、10 年前に大学間協定になった。現在は隔年開催の国際学術研究集会と毎年開催の学生の Summer School を行っている。今年秋オレンブルグで研究集会の予定である。Summer School は、毎年原爆記念日に合わせて開催され、学生たちは 8 月 6 日の原爆慰霊式に参加している。広大・OSU の学生にとっては英語を実際に使う良いチャンス・お互いの国を知るよいチャンスである。広大では 100 以上の大学間・部局間協定があるが OSU との大学間協定ほど大きな成果を上げている協定は他に類がないのではないと思う。OSU はたぶんモスクワ大学などといった、いわゆる、一流大学ではないが、そういった大学のレベルアップに寄与することは非常に大きな国際貢献になるものと思う。



4. ドイツとの交流 ―おもてなし―

ドイツ・ハンブルグに住んでいる広島出身の友人が、今年5月に11年ぶりに里帰りしてきた。友人夫婦は広島滞在中時間的余裕ができたので、宇品からフェリーで似島へ渡った。以下は、その友人から帰国後に受け取った便りである。

「広島にいた時に一度だけフェリーに乗り似島へ行きました。一番短いルートを選んだだけです。この島へどうしても行きたいと思っていたわけではありません。着いて歩いてお昼が近くなったのでレストランを探しました。探しても探しても、みつきりません。その時に道を歩いていた一人の女性が何かお手伝いしましょうかと声をかけてくれました。レストランは何処にありますかと聞いたら現在この島にはレストランは無いという事でした。お弁当を売っているお店はある、自分の所でコーヒーは飲めるとのこと。コーヒーだけでも飲もうと思って彼女の店に入りました。でも店はもうしてなくて個人の家でした。もし希望ならお弁当を持って来てもらうように電話すると言うのでお願いしました。コーヒーを飲んでいる間にお弁当が来て、食べていると日本茶を入れてくれました。其処を出る前に幾らですかと聞いたら全くいらぬというのです。でもそうはいかないと言ったら小さな瓶を持って来て心ばかりの金額を入れて下さいとの事。その時に私はケチをするつもりは無かったのに本当に少ししか入れなかったのです。それを現在とてもとても後悔しています。その人を見つけてお金を送りお礼を書きたいです……。」

似島の女性の心のこもった暖かいおもてなし、とても素晴らしいですね。まだまだ広島にも良いところが残っていると思いました。

余談になりますが、彼女の友人で、ハンブルグで20数年修業したシェフのレストラン―小紋―が、平和大通りサンルートホテル広島近くにあります。本格的なドイツ料理が楽しめるので、ぜひ行ってみてください。



5. まとめ

他国を理解することは大変難しいことである。その国でたぶん何年住んでもなかなかわからないと思う。されど、ともかく現地に行って体験するのが最善の方法ではないか。

(本稿は2018年6月26日に行われたTSS文化大学における講演の概要です。)